

# blue moonに恋をして

*Kasumi & Ryouichi*

---

桜 朱理

*Syuri Sakur*



エタニティ文庫

## 目 次

blue moon に恋をして 5

FLY ME TO THE MOON 177

書き下ろし番外編  
so happy 315

blue moon に恋をして

## プロローグ

抱き寄せられた瞬間に、自分もただの女でしかなかったのだと思い知る。

「……夏澄」

名前を呼ばないで。そんな聞いたこともないような、甘い声で……

最後の理性も、ためらいも、その声に溶けて消えそうになる。

吐息の重なる距離で見つめ合う。男の瞳に宿る情欲の輝きに、女としての本能が騒ぎ出す。

ずっと憧れだと思っていた。ただの憧れだと思っていたかった。

なのに、今この瞬間に、はつきりと自覚する。

この想いは恋だったのだと——

気づきたくなんてなかった。囚われたくなんてなかった。

近づいてくる唇を避ける術すべがわからず、夏澄は泣きそうになる。

自覚したばかりの恋が、夏澄の心を惑わせた。

触れた唇の思わぬ熱さに、夏澄は震えるまま臉まぶたを閉じる。

それ以外にどうすればいいのか、わからなかった。

唇に触れる吐息に、鼓動が乱れた。

普段の夏澄なら理性が止めた。

伸ばされた腕を拒んでいたはずだ。なのに、今、夏澄は男の腕の中に囚われていた。

大きな手のひらが夏澄の背中を辿る。それはひどく優しく、ずっとこの腕の中に囚われていたいとさえ思ってしまう。

そんなことは望めるわけもないとわかっているのに。

じんわりと広がる快感に、肌がざわめく。

唇が離れた瞬間、堪こらえきれずに涙が流れた。

「何を泣く必要がある？ 何も変わらない」

夏澄の涙を見下ろした男が、吐息の重なる距離で囁ささく。

何も変わらない？ 嘘つき……

きつと、あらゆるものが変わってしまう。

この夜を越えた朝。夏澄は自分のすべてが変わってしまう確信があった。

変わらないのはこの男だけ。

ずっと傍で見えてきた。この何もかもを手に入れている男が、日ごと夜ごとにその恋の

相手をかえて遊ぶさまを――

「夏澄」

名前を呼ばれるたび、心が恋しさに痛んだ。  
でも、この男には何も見せない。

今、夏澄が感じている痛みも、明日の朝、夏澄が覚えるはずの絶望も。

絶対に見せない。この男が何も変わらないというのなら、何も変わらない自分でいよう。

秘めやかな決意を胸に、夏澄は笑う。

これは一夜限りの夢だ。流されて、溺れて、我を忘れても、これは夢。

だから、明日の朝には何もかも、跡形もなく消える。消してみせる。

恋をした男の腕の中にいるはずなのに、ひどい寂しさが夏澄の心に忍び寄る。

でもそれは夏澄だけが知っていれば痛い痛みだ。

蒼く輝く月が二人を照らす。

月明かりに照らされて、愛した男の綺麗な顔が見えた。

そっと指先を伸ばしてその頬に触れると、愛おしいぬくもりが夏澄を包み込む。

愛しさと寂しさの狭間で、夏澄は自分の恋の終わりを感じていた――

## 1 雨夜の月あまよ

朝一番に出社した夏澄は、今日も広がる社長室の光景に盛大にため息をつきそうになる。

朝の爽やかな日差しが、広い社長室に差し込んでいく。窓の外には、初夏の真っ青な空と高層ビル群。実に気持ちのいい一日の始まりなのに、目の前の光景はその爽やかさを台なしにしていた。

夏澄の目の前――そこにあるのは夏澄の雇い主の執務机。

毎朝、毎朝、夏澄がきちんと片付けているというのに、今日も今日とてその執務机は派手に散らかっている。

「一体……どうしたらこんなに散らかせるのよ？」

毎日のことなのに、思わず呟きたくなってしまふ。荒れきった執務机の前に、夏澄はシャツの袖をまくると、気合を入れて掃除を開始した。

覗いてみたところで社長の散らかし癖が直るわけではない。

それは彼に仕えるこの五年で嫌というほど実感した。

社長曰く、『一見散らかっているように見えても、俺なりの法則でものを配置している。ちやんとどこに何があるかは把握している!!』とのこと。

そのわりにたまに書類やお気に入り万年筆が見つからずに、机の上をごそごそと探している気がするのだが、指摘すると子どものように拗ねるので、夏澄は大人の優しさで気づかないふりを通してはいる。

無造作に散らばった書類を手早く纏めて、社長がわかりやすいように並べる。

文房具や小物類を手に取りやすい位置に配置し、デスクの上を片付けたら、固く絞った雑巾で、デスク、書類が収められているキャビネット、ソファや応接セット、自分のデスクの順に次々と拭いていった。

拭き掃除が終わったら最後に社長室と、その手前にある自分の秘書室に隅から隅まで丁寧に掃除機をかけて掃除は終了。

この間、約二十分。この五年間、毎日、毎日繰り返してきた日課は、目を閉じていてもできるくらいに、夏澄の体に記憶されている。

綺麗になった室内に満足して、夏澄は珈琲を一杯淹れると自分のデスクにつく。

人気のない静かな社屋に、今はきつと夏澄一人。昼間は活気に満ちるこのビルも今はほとんど人がおらず、まるで微睡から目覚める寸前のような心地よい静けさが満ちていた。

この束の間の朝の静けさが夏澄は好きだった。

贅沢な時間に小さな満足感を覚えて、夏澄は微笑む。

伊藤夏澄。もうすぐ三十歳。

仕事は、日本でも有数の複合企業体、深見グループ社長の第一秘書。

見た目は『社長秘書』という華やかなイメージからはかけ離れていて、自身がモデルか俳優なみの派手な容姿をしている社長曰く、『地味!』の一言。

身長一五六センチ。胸元まで伸ばした黒髪をきつちりと一つに纏め、黒目がちの丸い瞳が可愛いと言えは可愛いという程度の平凡な容姿だ。

ローヒールのパンプスに、ページュや紺、黒等の無難な色のスーツを身に纏う姿は清潔感や清楚さはあるものの、女性らしい華やかさとは無縁だった。

『もう少し身に纏うものを華やかにしろ!』と社長には言われているが、仕事をするのに華美さもセクシーさも必要ないと、右から左に聞き流している。

そもそも忙しすぎる社長の補佐をする身では、見た目よりも動きやすさが優先。目上の人に会う機会も多いから見苦しくないように整えるものの、それで精一杯。今の格好が、おしゃれが苦手な夏澄の限界だと思っている。

珈琲を飲みながらメールのチェックをしたあと、各部署から上がってきている書類、郵便物を確認し、優先順に仕分けて社長のデスクの上に並べていく。

空いたスペースに社長が定期購読している大手全国紙、経済新聞の朝刊の束も置いた。次にその日の社長のスケジュールを確認して、必要な書類の準備やお昼の手配を済ませる。

ようやく一通りの手配と確認を終え、時間を確認すると九時十分前。

——もうこんな時間か。そろそろ……

外の様子を窺えば案の定、廊下に人の気配を感じて夏澄は立ち上がる。次の瞬間、秘書室の扉がノックもなく開け放たれた。秘書室は、社長室の前室として設けられているため、社長室に行く人は皆ここを通ることになる。

夏澄は出社した社長を頭を下げて出迎える。

「おはようございます」

挨拶に応えは返ってこない。顔を上げると、夏澄の雇い主でありこの深見グループの現社長である深見良一は、じろりとこちらに視線だけを向け、無言のまま社長室に入っていた。

乱れた歩調と眼差しを鋭さから考えるに、今日の深見はかなり機嫌が悪そうだ。

夏澄は嘆息まじりに天井を仰ぐ。

昨日、帰る時は普通だったのだから、夜の間に何かあったとしか思えない。

確か昨夜は、最近あまり仲のうまくいってなかったモデルの彼女とデートだったは

ずだ。

——デート中に彼女と何か揉めたかな……

「い、伊藤君……」

どうしたものかと考えていると、入り口から恐る恐るといった感じで、声をかけられた。

振り返ると、開け放たれた秘書室の入り口に、秘書室長が気弱そうな笑みを浮かべて立っている。

「室長。おはようございます」

「お、おはよう。これ、社長に届けに来ただけだね……」  
手に持った書類を振る秘書室長の顔は、かわいそうなほどに引きつっていた。

不機嫌な深見に廊下で遭遇して、その怒気に当てられたのだろう。

「ありがとうございます。今日の重役会議の資料ですか？」

「そう……。そうなんですが……」

夏澄は努めて何でもない顔で室長に歩み寄る。

「社長は、とても怒ってるみたいだったけど、何かあったのかね？」

資料を受け取った夏澄に、室長が声を潜めて、質問してくる。

「さあ？ どうでしょう？」

夏澄は肩を竦めた。

まさか、彼女とのデートが失敗したみたいですよとは言えない。

「伊藤君……大丈夫なのかね？」

「何がですか？」

「あんな社長と一緒にいて、怖くないのかね？」

「慣れてますから」

「さすが、深見グループの猛獣使い」

さらりと答える夏澄に、室長が尊敬の眼差しを向けてくる。不名誉なあだ名で呼ばれ、夏澄はがっくりと肩を落とした。

「そのあだ名、いい加減やめてください……私は別に猛獣使いでも何でもありません」

「いやだって、伊藤君くらいのものだよ？ あの不機嫌そうな社長に平然と対応できるうえに、機嫌を直せるのは!! 僕、情けないけど、あんな恐ろしい顔をした社長に話しかけるなんてできないよ！」

「そんなことはありませんよ」

拳を握って力説され、夏澄は苦笑せずにはいられない。

深見良一。今年三十五歳。経済界の若き帝王と呼ばれ、強烈なカリスマ性を持った経営者として世に知られている彼は、祖父が興じた建設会社を現在の複合企業体にまで発

展させた。

様々な分野の企業を戦略的事業投資によって次々に傘下におさめ、不況が叫ばれて長い昨今も順調に業績を伸ばしている。

しかも深見は仕事ができるだけでなく、一人の男としても魅力に溢れていた。

一八七センチの長身に逞しい体つき。少し癖のある黒髪を後ろに軽く撫で付けており、目鼻立ちのはっきりとした彫りの深い顔立ちは、女が放っておかない色気を宿している。圧倒的なカリスマ性と強烈な存在感を持つこの男は、当然のようにいつも複数の女性たちに囲まれ、日ごと夜ごと恋人をかえて派手に遊んでいた。

お金、地位、名声、容姿、才能、そして美しく華やかな恋人たち。人が羨むものすべてを手に入れた嫌味な男。それが夏澄の雇い主だった。

普段の彼は、どちらかといえば鷹揚で快活な性格をしているのだが、時に不機嫌なオーラを纏っていることがある。大企業の経営者としてのストレスや、恋人たちとの大小取り混ぜたトラブルなど、理由はその時によって様々だが、カリスマ経営者といえど人間。ストレスがたまることも、機嫌が悪くなることもあるだろう。

機嫌が悪いといってもせいぜい目つきが少し悪くなり、足音が乱れるくらいで、人に八つ当たりをするとか、あからさまに不機嫌な顔を見せるというわけではないのだが、顔が端整で存在感があるだけに威圧感が凄まじいのだ。おかげで周囲の人間はその威圧



感に圧倒されて、声をかけることはおろか、傍に近寄ることすらできなくなる。

社長秘書に抜擢された当時は、夏澄も不機嫌な時の威圧感にびくびくと怯えていたものだが、深見が不機嫌さを全開で見せるのは、気を許した人間の前だけだと気づいてからはあまり怖くなくなった。夏澄に対しては時に痲癩を起すこともあるが、二人でいる社長室の中でくらしい素の感情を出してもらって構わないし、それだけ自分がある帝王に信頼されていると思えば嬉しくもあった。

それに、あとで自分の態度を、深見が反省しているのも知っている。

普段は本当に俺様のくせに、そういったところが深見の可愛いところだと夏澄は思うが、室長や他の秘書仲間やはり不機嫌な時の深見が怖いらしい。

そんな不機嫌な深見に平然と対応し、時に諫め、宥めることもする夏澄は、気づけば深見グループの猛獣使いというあだ名がついてしまった。

「十時からの重役会議までに、社長の機嫌はなんとかなるかね？」

「どうでしょう？ やれるだけはやってみますが……」

「伊藤君!! そんな気弱なことを言わないでくれ!! 社長の機嫌は君にかかっている!!  
どうか、十時までに社長の機嫌を直してくれ!! 頼む!!」

「わ、わかりました……」

自分の父親と同世代の室長に手を握らなければかりに懇願されて、夏澄は思わず一歩後ろ

に下がって頷く。

「頼む! 頼むよ!! うちの社運は、君にかかっているんだからね!!」

そんな大げさなとは思いますが、室長たちにとっては切実な問題なのだろう。

最後まで「どうか頼むよ!! ガンバってくれ!!」と夏澄に発破をかける室長を苦笑しながら見送ったあと、預かった書類を机の上に置き、気持ちを切り替える。

「さて、と」

気合を入れ直すと、夏澄は秘書室の隅に併設されている小さなキッチンで、深見のために珈琲を淹れる準備をする。

出社して一番に深見が求めるのは、美味しい珈琲。

この一杯が気に入らなければ、途端にテンションが下がるため注意が必要だが、この珈琲をうまく淹れられればそれだけで機嫌が直ることもある。

だから、夏澄はこの朝の一杯に非常に気を使っていた。

不機嫌な深見が今日の朝刊を確認し、気持ちを整理するまでの時間を見計らいつつ、夏澄はネルドリップで丁寧に珈琲を淹れた。

不機嫌な時は甘い物を欲しがる深見のために、マドレーヌを二つほど添える。

時間を確認すれば、深見が社長室に入って十五分ほどが経っていた。

ちょうどいい頃合だ。そろそろ深見の頭も少しは冷えているだろう。

夏澄はトレイに珈琲とマドレーヌをセットして社長室に向かった。扉をノックすると短く不機嫌な低音で「入れ」と応えが返る。

「失礼します。珈琲をお持ちしました」  
入室し声をかけると、書類から顔を上げた深見が険しい眼差しでこちらを睨みつけてきた。

——まだ少し早かったかしら？

いまだ不機嫌さ全開の深見に夏澄がそう思った時、彼の眉間に寄せられた皺が、トレイの上に置かれたマドレーヌを認めて少し緩む。

——大丈夫そうね……

かすかに和らいだ深見の表情を確認して、夏澄はいつもの秘書の顔の下に苦笑を隠し、トレイを持って深見のもとへ向かう。

差し出したマドレーヌと珈琲を受け取った深見が、無言のまま珈琲に口を付けた。

——ある意味、この瞬間が一日の中で一番緊張するかも……

珈琲を飲む深見の様子をそっと窺いながら、夏澄は広げたままになっている新聞をきれいに畳んでいく。

カップ半分ほど珈琲を飲んだ深見が大きく息をつき、「すまん」と一言呟いた。

先ほどまで深見が纏っていた不機嫌オーラがかなり穏やかなものになったことを確認

した夏澄は、今日も自分が深見を満足させられる珈琲を淹れられたことにホツとする。

そして、こちらの様子を窺うように見る深見に、何も言わずに微笑んだ。

自分の態度を反省している深見に、追い打ちをかけるつもりはない。

「うちの秘書殿は優秀だな。俺の不機嫌の取り方をよく知っている」

深見はため息まじりにそう言うのと、マドレーヌに手を伸ばし、かぶりついた。大好物によりやく頭が冷えたのか、深見の雰囲気がいともどおりのものに戻る。

マドレーヌを一つ食べ終えた深見がぼそりと「聞かないのか？」と尋ねてきた。

「何をですか？」

何を聞かれているのかわかっていて、あえて静かに問い返せば、深見が再び小さくため息をつく。

「俺が不機嫌だった理由」

そんなこと聞くまでもない。

深見の行動・思考パターンは、彼の第一秘書として働いてきたこの五年でよくわかっているつもりだ。

昨日、深見がデートしていた相手は、モデルをしているだけあって容姿はとても美しかったが、まだ二十代前半と若いせいかわプライドが高く、わがままなところがあつた。

最初のうちは、彼女のわがままに付き合っていた深見も、度重なるそれに限界を超え

たのだろう。

もしくは深見がもつとも嫌う呪文を唱えたか。

結婚——

その一言を、一瞬でも匂わせると、途端に深見は手のひらを返す。

誰にも囚われたくないこの若き帝王は、束縛を象徴するこの呪文を何よりも嫌っているのだ。

若く自信に溢れていた彼女は、自分であれば大丈夫と思い、その呪文を使ってしまったのかも知れない。

どちらにしろ、深見の不機嫌の原因は、考えるまでもなく昨夜の彼女とのデート。

しかし、珍しいこともあるものだ。女性関係の愚痴を夏澄に言おうとするなんて……来る者は拒まず、去る者は追わずの典型的なプレイボーイである深見だ。関係が終わった女には拘らないし、愚痴を言うような男でもない。興味がなくなったものに対しては、いつそ見事なまでに関わろうとはしない。

それまで散々甘やかされてきた女たちは、その呪文を唱えた途端に変わる深見の態度に、うるたえて必死にとりなそうとするが、深見はそれまでの態度が嘘のように冷ややかで、取り付く島もない。そして、二度と自分には近寄せないようにしてしまうのだ。おかげで、そのしわ寄せはすべて夏澄に回ってきた。

過去どれだけ深見の女性関係のトラブルに巻き込まれ、後処理あとしよりに手を焼かされたかわからない。

——とはいえ……

女性と揉めたあと、こんな気弱そうな深見の姿など見たことがなかった。

「体調でも悪いんですか？」

思わずそう問いかければ、深見の眉間に深い皺しわが寄る。

「どういう意味だ？」

「言葉どおりの意味です。そんなことを私に聞かれるなんて、よほどお疲れなのかと思いまして」

睨みつけられて、一瞬、怯みそうになるが、何事もなかったように平然と答える。

必要とあれば愚痴でもなんでも付き合うが、こと恋愛関係において夏澄が深見にアドバースできることなんて何もない。それは深見もわかっているだろうに……

真顔で問い返した夏澄に、深見がむっつりと黙り込んだ。

束の間の沈黙が二人の間に落ちる。

深見も自分からしくないことを言ったと自覚したようだった。

「いや、いい……もう終わったことだった。忘れてくれ」

嘆息まじりにそう言うのと、深見は気持ちを切り替えるように残りの珈琲コーヒーを飲み干した。

「わかりました」

答えた夏澄は、深見が自分の顔をじっと見ていることに気づく。

「社長……?」

夏澄の呼びかけに、深見は我に返ったように視線をそらした。

「すまん、女の代わりはいくらでもいるが、優秀な秘書殿の代わりはそうそういないな  
 と思ってる……」

「何ですか突然?」

いきなりの誉め言葉に喜びよりも不審が先立ってしまい、夏澄の眉間に皺しわが寄る。

「さあ、何だろうな? まあいい、伊藤。今日の予定は?」

一人何かを納得した様子の深見が話題を変えてくるのを訝いぶかしく思いつつも、夏澄もい  
 つもどおりに淡々と今日のスケジュールを告げていく。

そのまま打ち合わせをして多少のスケジュール変更をした夏澄がカップとトレイを下  
 げようとした時、「伊藤」と名前を呼ばれた。

「はい?」

「明日の午後七時から、何か予定は入っていたか?」

問われて夏澄は明日のスケジュールを確認する。

「明日の七時でしたらMN産業の営業部長が会食を希望されていますが?」

「ああ。そうだったか。悪いがその会食はキャンセルして、七時からの時間を空けてく  
 れ。MNの部長との会食は……今週中のどこかで調整してくれ」

「かしこまりました。では明日の七時からの予定はどういたしますか?」  
 「いつものところを二名で予約しておいてくれ」

告げられたのは六本木にあるフレンチレストラン。さらに、二十代女性に人気のブラ  
 ンドのネットワークスと花束の手配を依頼されて、ああ、デートかと思ふ。

あそこのレストランを使用するということは、最近予定の合わなかった六本木のホス  
 テスの同伴だろうとあたりをつける。下手なものを手配すると彼女から嫌味が飛んでく  
 るから面倒だと内心のため息をつきながら、夏澄は頭の中で素早く段取りを考えていく。  
 「ああ、花で思い出した。レイカの舞台が今週で千秋楽せんしゅうがくを迎えるはずだ。花の手配はど  
 うなってる?」

本当についてに思い出したように、ここ一年ほど付き合ひのある中堅女優への手配を  
 確認される。

「すでに社長のお名前前で、レイカ様のお好きな薔薇の花を百本当日に届くよう手配して  
 あります」

「そうか、わかった」

その後も次から次に、女性たちとのデート場所の予約と、プレゼントの手配を依頼さ

れる。

間違わないようにメモを取りながら、夏澄はあきれた気持ちで湧き上がってくるのを堪えられなかった。

——さっきまでの態度はなんだったのかしら。心配して損した……

内心で毒づきながらも、体調不良ではなさそうなおことにホッとした。

秘書室に戻ってカップやトレイ、珈琲コーヒーを淹れるのに使ったネルの後片付けをする。その後、夏澄は、自分のデスクに座り、プレゼントのリストを改めて見てため息をついた。

——本当にお盛んなことで……

こうして深見にデートやプレゼントの手配を頼まれるのは初めてではない。

これも秘書の仕事と割り切ってはいるが、常に複数いる深見の恋人たちの性格や好みを把握し、それぞれのプレゼントが被らないように配慮しつつ、デートに間に合わせて用意するのは本当に骨が折れる。クリスマスシーズンなんて毎年地獄だ。クリスマスに浮かれた幸せそうなカップルや家族連れで賑わう街中を、彼女たちにプレゼントを届けるために走り回る羽目になる。しかも、せっかくプレゼントを届けてもお礼を言われるわけでもない。それどころか、クリスマスに深見と会えなかった彼女たちから嫌みや文句が飛んでくるのだ。当の深見はその年一番お気に入りの恋人とホテルやレストランでデートを楽しんでいるのだから、やっつけられないなんてものではない。

深見に文句を言ったところで、あの悪行が改善するとは全く思えない。むしろ文句を言ったら、面白がって余計に事態をややくしくすることは、目に見えている。どうせ数か月、長くて一年で彼女たちは入れ替わるのだ。

いらぬ口出しをしないのが一番波風が立たないと、最近はもう悟りの境地で彼女たちの嫌味や文句を聞き流している。

だが、時々、不思議になる。

いくら顔がよくてお金持ちであっても、あんな女癖の悪い男のどこがいいのだろう？ 『誰にも囚われないあの自由な傲慢さが、あの人の最高の魅力なのよ』とは、かつての彼の恋人が言った言葉ではあるが、夏澄にはその魅力がさっぱり理解できそうにない。

これまで一度も憧れめいた恋心を抱いたことがなかったとは言わないが、間近で深見の女癖の悪さをずっと見続けてきたせいでも、そんなものはきれいさっぱりと吹き飛んだ。

容姿や地位が魅力的な男であることは理解しているし、経営者としての手腕も、仕事に向き合う姿勢も尊敬している。しかし、仕事ならともかく、恋愛では絶対にあんな危ない男は選ばない。

それに、年がら年中、深見の恋愛沙汰をすぐ傍で見せつけられてきたせいも、恋愛ごとはお腹いっぱい、もうたくさんと思っている。

もともと夏澄は恋愛には奥手で、大学の頃に付き合った人もいるにはいるが、それは

本当にままごとみたいな恋愛だった。結局キスを二、三回したところで、先輩だった彼の就職を機に自然消滅してしまったような経験しかない。

「だいたい今は仕事が目白くたく、恋愛に興味は持てそうになかった。

経営者としての深見は夏澄にとって憧れだ。次々に新しい発想でもって事業を成功させていく手腕も、その着眼点の確かさも学ぶことは多い。

「何か新しいことを思いつくたび、子どものように目をキラキラと輝かせて、全力で走り回る。そんな男の背中を追いかけるだけで、今の夏澄は精一杯。よそ見なんてしていい暇はなかった。

「何だかんだと言いながらも、夏澄も深見の魅力に取り憑かれた人間の一人なのだ。

「なのにどうしてだろう？ 最近、慣れて何も感じなくなっただけのこの仕事に憂鬱さを感じるのは……」

「思わず零れそうなため息を堪えて、プレゼントのリストを眺める。

「……この女癖の悪さがなければ、本当に尊敬できる上司なんだけどね」

「プレゼントのリストを指先で弾きながらぼそりとそう呟く。

「ほおー。面白いことを言ってるな。それはどこの誰の上司のことだ？」

「手元のリストがバシッと軽い音を立てると同時に、低く艶のある声が聞こえ、夏澄はぎよっとして顔を上げた。

「げっ、社長。何で……？」

「じゃ、社長……」

「社長室の扉の前に立ち、なぜか楽しげにこちらを見ている深見と目が合って、夏澄の背中に冷や汗が流れる。

「で、どこの誰の女癖がなければ尊敬できる上司なんだ？」

「にやりと笑みを深めて、深見が夏澄のデスクの前まで歩いてくる。その追及に、夏澄は顔が引きつりそうになった。

「何のことでしょう？」

「慌ててプレゼントの一覧が書かれているシステム手帳を隠し、夏澄は空々しい笑みを顔に張り付けてすっとほけた。

「先ほど、うちの秘書殿がずいぶん興味深いことを呟いていたんだ。ぜひとも誰のことを言っていたのか教えてほしいのだが？」

「顔を覗き込んできた深見に、夏澄は顎を引き、少しでも距離を取ろうと背をのけ反らせる。

「さすがに本人に面と向かって、あなたの女癖の悪さに呆れますと言う度胸はない。

「何のことかさっぱりわかりません」

「ふーん？ じゃあ、さっき聞こえたと思ったあれは、俺の空耳か？」

——今日はやけに絡んでくるわね。

「やっぱり昨日の彼女と何かあったんだろうなと思うが、そのはけ口をこちらに持ってきたらたまたまならない。誰も聞いてないと油断して不用意なことを呟いた夏澄も悪いのだが、八つ当たりまじりに玩具おもちゃにされるのは御免ごめんだ。」

「最近、お忙しかったのでお疲れなんじゃないですか？ 少しスケジュールを調整しましょうか？」

「なんならデートのスケジュールを減らしましょうか？ と目に力を込めて、にっこりと告げる。深見の瞳がわずかに眇すがめられ圧迫感が増すが、夏澄も負けじと微笑みを浮かべたままに睨み返した。ここで一步でも引いてしまえば、問い詰められた挙句に無理難題を吹っ掛けられる。それがわかっている以上、絶対に引くわけにはいかなかった。」

しばし、無言のまま二人で睨み合う。

「いい度胸だな……伊藤？」

先に沈黙を破ったのは深見だった。

「何のことかわかりませんが先ほどから申し上げています」

あくまですつとほける夏澄に、深見が大げさに肩を竦すくめた。

二人の間にあつた緊張感が緩ゆるむ。

「まあ、いいだろう。今回は朝の件があるから見逃してやろう」

珍しく深見のほうから引いてくれた。

「精力的な社長にお仕えてきて、私もうれしいです。スケジュールは先ほど確認したままで大丈夫そうですね」

深見が呆れたような視線を向けてくるが、夏澄は張り付けた笑みの圧力で押し通す。

「……たまに思うが、うちの秘書殿ほど強情で、強気な人間もいないんじゃないか？」

「お褒めにあずかり光栄です」

皮肉に礼を返すと、深見がわざとらしくため息をついた。夏澄はそれには気づかなかったふりで、さつさと話題を変えることにした。

「そんなことより社長。何か用があったんじゃないですか？」

「ああ、そうだった。来週の会議に間に合うようにこの資料をデータ化して纏まとめておいてくれ」

「わかりました」

差し出された付箋ふせんだらけの資料を夏澄は受け取る。

「頼む。それと珈琲コーヒーのおかわりを」

「はい」

それだけ言うのと深見は社長室に戻っていった。

その背中を見送った夏澄は「助かったー」と安堵の息を吐きながら、珈琲のおかわ

りを淹れるために立ち上がる。そして、くすりと小さく笑った。  
資料と珈琲はきつと口実。いつもなら内線で済ませるような用事のために、わざわざ顔を出したのは、きつと朝の自分の態度を省みた結果だろう。

こんなところがあの帝王の憎めないところだと夏澄は思う。

まして、深見がそういう素の自分を見せるのは本当に気を許した人間だけと知っているから余計にそう感じるのかもしれない。

——さて、あのわがままだけど憎めない社長のために、美味しい珈琲を淹れてくるか……

キッチンに向かう夏澄の足取りは、朝一番と違ってどこか軽やかだった。

十

「伊藤、次の予定は？」

「早川社長のところの創立記念パーティーです」

無事に商談を纏め、社用車に乗り込むなり飛んできた深見の問いに、夏澄は即座に答える。

「そうか、わかった。パーティーに顔を出したあとは社に戻って、中国支社の状況を確認

認したい」

「わかりました。手配しておきます」

商談に、会議、出張、各種フォーラムへの参加と、深見の予定は分刻み。休みを取る暇などないほどにスケジュールは真っ黒に埋め尽くされている。

せめて移動の間だけでも休んでほしいと思うのだが、深見は今もモバイルパソコンを開いて市場の調査や上がってくる連絡に次々と対応し指示を飛ばしている。深見の指示が一段落した頃にはパーティー会場であるホテルに到着していた。

息つく暇もなく会場に入った深見を、すぐさま人々を取り囲む。一緒に会場に入った夏澄は邪魔にならないように、壁際に下がって深見の様子を見守る。

こういう場所に来ると、深見はやはり特別な人間なのだと思うにはいらなかった。どんな集団の中にもいようと、深見は目立つ。容姿が整っているのももちろんだが、自然と人を惹きつける何かが、深見にはあるのだ。

今も会場中の注目を一身に集めている。一言でも深見と言葉を交わそうと、人がどんどんと集まってきた。

大勢の人間の中心で鷹揚に対応する深見は、まさしく王者の風格を纏っていた。

——うちの社長はやっぱ凄い人でしょう？

そんな風に周囲の人間に自慢したくなっている自分に気づいて夏澄は苦笑する。



夏澄が自慢しなくても、深見の凄さは皆が知っているというのに……

——何を考えてるんだか……今日は移動が多かったから少し疲れてるのかしら？

夏澄以上の仕事量をこなしている深見は平然としているのに……まだまだ力不足な自分に、夏澄は気を引き締める。

「恋する女の子の瞳じゃな」

「え!？」

不意に背後から耳元に囁きかけられて、夏澄は驚きに声を上げた。耳を押さえて振り返ると、六十代くらいのロマンズグレーの紳士と三十代後半くらいの一目で秘書とわかる男性の二人連れが立っていた。

「会長！ 戸田さん！」

よく見知った二人連れに、夏澄の表情が緩む。

夏澄に声をかけてきたのは深見の父親——深見孝之とその秘書の戸田だった。

孝之は今でこそ仕事を息子である深見に譲り、第一線から退いているが、かつては父親から受け継いだ建設業を発展させ、今の複合企業体の礎を作り上げた人物で、夏澄の元雇い主だった。今は、グループの会長職に就く傍ら、趣味の会社をいくつか経営している。深見に負けず劣らず元気に走り回っているため、会うのは数か月ぶりだった。

「久しぶりじゃな！ 夏澄ちゃん。元気にしていたか？」

軽く手を上げて挨拶してくる孝之に、夏澄も笑顔で頭を下げる。

「はい。ご無沙汰して申し訳ありません。会長もお元氣そうで何よりです」

「夏澄ちゃんの観察眼もまだまだだな。わしは全然元氣じゃないぞ？ 実はな……」

途中で言葉を切って、内緒話をするために近寄るように指示される。夏澄は何か病氣でもしているのかと心配しながら孝之に耳を近づけた。

「可愛い夏澄ちゃんを手放して、むさ苦しい男の秘書一人に絞ったもんだから、毎日、毎日がなくて元氣が出んのだ」

「会長……」

真面目な顔をしてそんなことを言う孝之に、夏澄は思わず笑い出す。

「笑い事じゃなく大変なんだぞ？ 戸田は鬼のようにこの老体に仕事を押し付けてくるんだから」

「むさ苦しくて鬼のような秘書で申し訳ありませんでしたな」

孝之の背後にいた戸田が、冷たい声音で二人の会話に割って入った。

「何だ？ 戸田！ わしと夏澄ちゃんの内緒話を盗み聞か!？」

「聞こえるように言ったくせに何言ってるんですか。しかし、今日、伊藤君の顔を見てお元氣になったようなので、明日からもっと仕事の量を増やしても大丈夫ですな」

大げさなりアクションで文句を言う孝之に、戸田は冷たい一瞥を向け、ずけずけと

切つて捨てた。

「鬼か？ やっぱりお前は鬼なのか？」

「それだけ騒ぐ元気があれば、仕事量を今の二倍にしても問題ないでしょう」

「ほらな！ 夏澄ちゃん、見てくれ!! この鬼の所業を!!」

目の前で繰り広げられる二人のやり取りに、夏澄は懐かしさと慕わしさを覚えた。

就職したばかりの頃、夏澄は当時社長だった孝之の秘書を務めていた。今のように第一秘書だったわけではなく、大勢いる秘書の中の一人だったが、孝之には可愛がってもらった。そして、当時から孝之の第一秘書だった戸田には秘書のイロハのすべてを叩き込まれた。今、曲がりなりにも夏澄が深見の第一秘書を務めることができているのは、この二人の教育のおかげだといっても過言ではない。

「戸田さんもご無沙汰しております」

「伊藤君も元氣そうで何よりだ。活躍は耳にしている。愛弟子の評判に私も鼻が高いよ」

夏澄が挨拶をすると、戸田もそれまで孝之に向けていた鬼秘書の顔ではなく、目元を緩めて微笑んだ。

「ありがとうございます。まだまだ戸田さんの足元にも及びませんが、精一杯務めさせていただいています」

お世辞も追従も決して言わないかつての厳しい上司からストレートな褒め言葉をもらい、夏澄は喜びに頬が熱くなるのを感じた。

「こら！ 戸田！ わしを無視して夏澄ちゃんといひ雰囲気を作るな!! 浮氣していたと嫁に言いつけるぞ!!」

微笑み合う戸田と夏澄の間に孝之が割り込む。

「何を馬鹿なこと言ってるんですか……麗しい師弟愛を邪な目で見ないでください。さあ、伊藤君に会うこともできたし、さっさと早川社長のところに挨拶に行きますよ」

「いやだ。もう少し夏澄ちゃんと話がしたい!」

「子どもじゃないんですから、駄々をこねないでください。伊藤君。またあとで時間があれば……」

「はい」

「こら！ 戸田!! わしは曲がりなりにもお前の雇い主だぞ!? 襟首をつかんで引きずるな!!」

「だったら、ご自分で歩いてくださいよ!」

戸田に引きずられるようにして歩き出した孝之が「夏澄ちゃん、またあとでなー!」と元気に手を振ってくれる。夏澄はくすくすと笑いながらそれを見送った。

嵐のように騒がしかった二人が去ったあと、夏澄は先ほど言われた『恋する女の子の

瞳』という言葉の意味を聞き忘れていたことに気づく。

——恋？ 私が……？ 誰に？

一瞬、深見の顔が脳裏に浮かんでぎよつとする。

——ないない！ それだけは絶対ない！！

——やだ……今日は忙しかったから、本当に疲れてるのかも？

入ってゆつくりしよう。帰ったら、お風呂に入らう。

深見のことが思い浮かんだのは疲れによる気の迷いだと断じ、夏澄は今の考えをさっさと忘れることにする。

だいたい、孝之は他人の恋バナが大好きなのだ。誰かに恋をしていなくても、やり手婆のごとく仲人するくらいのはやりかねない。

孝之は縁結びの名人として一部には非常に有名だった。この二人が合うと直感で思ったら、あの手この手で、どんなことをしても結びつけてしまう。

だが、孝之の仲人はその成功率もさることながら、その方法も大変型破りだと評判だ。夏澄も、孝之の仲人でうまくいったカップルはたくさん知っているが、その過程における無茶ぶりをも噂で聞いている身としては、自分が仲人されるのはご遠慮申し上げたい。

——余計なことを聞かなくて正解だったかも？ きっとあれは会長のいつもの挨拶。

馬鹿なこと考えてないで、仕事、仕事……

気を取り直して、深見はどうしているかと会場内に視線を巡らせると、彼は相変わらず人に囲まれていた。

深見が何か冗談を言ったのか、彼を囲む人垣がどっと笑いに包まれる。その瞬間、深見が眉間に皺を寄せたことに夏澄は気づいた。

一瞬の出来事だったので、周囲の人々がそれに気づいた様子はない。深見もすぐにいつもの営業スマイルを浮かべて周囲と談笑を続けたが、夏澄は深見から目を離さなかった。

そうして、しばらくの間、注意深く深見の様子を観察していた夏澄は、一つの確信を持つと時間を確認して、会場を抜け出した。

「伊藤！ どこに行っていた？」

いくつかの手配を済ませた夏澄が会場に戻ると、すぐさま深見が歩み寄ってきた。一通りの顔つなぎや挨拶は終わったのだろう。

「申し訳ありません。フロントで部屋の手配をしていました」

「部屋？」

深見が怪訝そうにこちらを見やったあと、にやりと笑って夏澄の顔を覗き込んでくる。

「明日は槍でも降って俺は死ぬのか？ 堅物の秘書殿からお誘いを受けるなんて……も  
ちろん喜んでそのお誘いを受けるが？」

艶のある低音でからかいまじりに囁きを落とされて、呆れるより先に、夏澄は安堵を  
覚えた。

——こんな軽口を言えるのならまだ大丈夫ね……

「ええ、お誘いです。このあとの予定はすべてキャンセルしたので、お付き合い願えま  
すか？」

にこりと微笑み、そう返せば、深見が驚きに目を瞪った。

「部屋にいつもの鎮痛剤を用意してもらっています。少しお休みください」

驚いたようにひよいとその整った眉を跳ね上げた深見が、大きく息を吐き出した。

「うちの有能な秘書殿は、なんでもお見通しか……」

その言葉に、夏澄は自分の予想が間違っていないかったことを知る。

近くで見ると、深見の顔色が朝よりも青くなっている。周りで湧き上がる笑い声に反  
応して、眉間にほんのわずかに寄った皺。それは寝不足の深見が時折起こす偏頭痛の前  
触れだった。

深見は自己管理がしっかりしているように見えて、仕事に没頭すると、睡眠や食事が  
すぐにおろそかになる。そうして、睡眠不足になり偏頭痛を起こしてしまうのだ。周囲

が気づかなければ倒れるまで我慢してしまうため、夏澄は気づいた時点で強制的に休ま  
せることにしていた。

「お付き合いいただけますか？」

「喜んで……というか、俺に拒否権はないんだろう？」

「ええ。行きましょう」

夏澄と深見は目立たないように会場を出ると、部屋に向かうためエレベーターに乗り  
込んだ。他に客の姿はなく、エレベーターの中は夏澄と深見の二人きりだ。周囲の視線  
がなくなっただけで、深見が顔をしかめてこめかみを揉んだ。気が緩んで頭痛がひどく  
なってきたのだろう。

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。これくらいなら鎮痛剤を飲まずに少し寝れば治ると思う。悪かつ  
たな」

「いいえ。社長のスケジュールを管理しきれなかった私の責任です」

夏澄は短く首を振る。最近、深見が新規プロジェクトの立ち上げに夢中になっている  
ことに気づいていたのに、頭痛を起こす前に休ませることができなかった自分に落ち込  
んでいた。

「そんな顔をするな。スケジュールに関しては俺のわがままだ。それに普段は大人しい

秘書殿を怒鳴らせるほど頭痛はひどくないぞ？」

「社長……」

今思えば赤面ものの恥ずかしい過去を思い出させる深見の言葉に、夏澄は思わず顔をしかめた。

「できればもうあのことは忘れてください……」

「それはできない相談だな。伊藤のあの雄姿は今も<sup>まぶた</sup>瞼に焼き付いている。一生忘れることはないな」

愉快そうにからかってくる深見に、夏澄は「もう、本当にやめてください……」と小さく呟くことしかできなかった。

五年前——それはまだ二人が一緒に仕事を始めたばかりのころのことだ。仕事のしすぎで体調を崩した深見を夏澄は怒鳴りつけた上に、説教したことがあった。

『お茶くみくらいしかできない秘書ですが、わかることはあります。今、社長に必要なのは休養です！ 寝不足の頭ではいい考えも浮かびません。そんな真つ青な顔で人に八つ当たりする暇があるなら、寝てください！』

いくら必死だったとはいえ、体調が悪かった深見を怒鳴りつけた自分の所業はあり得なかったと思うし、できれば消してしまいたい過去だ。

だが、深見はこのエピソードが気に入っているのか、ことあるごとに話題にして夏澄

をからかってくる。

「あの時は本当に生意気なことを言いました。申し訳ありません」

「謝るな。あの時、伊藤に怒鳴りつけられたからこそ、今の俺がある。おかげで他の奴らともちゃんと向き合えるようになったんだ。感謝しているんだから、謝られるとこっちが困る」

「社長……」

深見から不意にももらった感謝の言葉に、夏澄の鼓動がどうしようもなく高鳴った。動揺を深見に悟られたくなくて、俯く。

ちよつど目的の階に到着し、深見と夏澄はエレベーターを一緒に降りた。

「伊藤。部屋はどこだ？」

「こちらです」

深見の前を歩き部屋まで誘導しながら、夏澄は乱れた鼓動を落ち着かせようと、静かに息を吐き出した。

——あの出来事を社長があんな風に思っていたなんて知らなかった。

少しは自分もこの帝王の役に立つことがあったのだと思うと、自然と心が浮き立った。

ゆっくり休めるようにと、部屋はセミスイートを取っていた。

部屋に辿り着くと、夏澄は深見の背後に回り、上着を脱ぐのを手伝う。受け取った上着は軋しんがでできないようにハンガーにかけてクローゼットに片付けた。

一人掛けのソファに座った深見は肘掛けに片肘をついて、深く息を吐き出す。億劫おぼそうにネクタイを緩ゆるめる仕草に、何故か視線が吸い寄せられた。

ワイシャツのボタンが一つ、二つと外される。覗いた首元にどきりとした。

端正な顔に疲れを滲じませる深見。見慣れたはずのその光景から視線が外せない自分に、夏澄は戸惑いを覚える。

疲れた男の表情に色気を感じていた。

先ほど孝之に恋と言われて深見を思い浮かべたことと相まって、自分のそんな心の動きに妙な焦あせりを覚える。

—— やっぱり、今日はいつてもより疲れてるみたい。まあ、社長でさえ疲れを隠せないのだから、私が疲れていてもおかしくないか……

無理やり自分をそう納得させて、夏澄は深見から視線を逸らした。

「何か飲まれますか？」

「……頼めるか？」

「はい。ちよつとお待ちください」

部屋に備え付けられていたポットでお湯を沸かし、熱いほうじ茶を淹いれる。

「社長。どうぞ、お茶です」

「ああ、すまない」

深見がお茶を飲んで一息ついている間に、夏澄はポットを持って洗面所に向かった。

浴室に備えられていたフェイスタオルにポットのお湯をかけて、熱いうちにタオルを絞る。手のひらが、湯の熱さに赤くなつたが、夏澄は構わずにタオルに水気がなくなるまで固く絞った。

部屋に戻ると、熱いタオルを深見に手渡す。

「社長。これ使ってください。疲れている時は目元を温めると楽になりますから」

「わかった。やってみる……」

深見は夏澄に言われるまま、熱いタオルを目元にあてて温め始めた。

「あー、いいなこれ。仕事帰りの居酒屋で、サラリーマンがおしほりで顔を拭く気持ち  
がわかるな……」

リラックスした声で深見はそんなことを呟いた。

「鎮痛剤はどうされますか？」

「いや、これで大分楽になったから大丈夫だ……」

「わかりました。落ち着いたら寝室でちゃんと休んでください」

「……ん。わかった」

しばらくソファで目元を温めたあと、深見は温くなったタオルを手にして立ち上がった。

「三時間したら、一度起こしてくれ」

「はい。私はこちらの部屋にいますので、何かあればお声をおかけください」「すまん……」

額くと深見は夏澄にタオルを手渡して、寝室に入ってしまった。リビングルームから寝室の様子を窺う。しばらくは寝室のほうで物音がしていたが、やがて静かになった。

カップやタオルを片付け、さらに十分ほど待ってから、夏澄は深見の様子を確認するため、そっと寝室に入った。

静かな寝室に穏やかな寝息が聞こえて、夏澄はひとまず胸を撫で下ろす。

ナイトランプのほのかなオレンジの明かりに照らされた深見の顔色も、先ほどよりも幾分改善しているように見えた。

夏澄は深見を起こさないように気をつけつつ、ベッドの下に脱ぎ散らかされたズボンやワイシャツを拾い、ハンガーにかけた。

サイドテーブルの上に、ミネラルウォーターのペットボトルとグラスを準備する。そして、深见到何かあってもすぐにわかるようにと、ドアをほんのわずかに開けたままにして、夏澄は寝室を出た。

リビングルームに戻り、今度は自分用にお茶を淹れる。

ソファに座ると、一気に疲労が押し寄せてきた。

けれど、ここで休んでいる暇は夏澄にはなかった。

熱いほうじ茶を飲んで一息入れると、夏澄は動き出す。

念のために深見を起こす予定時間をスマホのタイマーでセットし、鞆からタブレット端末を取り出すと、本社に残っている他の秘書たちと連絡を取る。そして、今日、キャンセルした分の予定の割り振りを依頼する。それと同時に、来週までの深見の予定を緩やかなものに組み直した。

すべての連絡が終わったのは、それから一時間ほどが経ってからだった。

窓の外はすっかり夜の帳が降りていた。摩天楼がその真価を発揮しネオンを瞬かせ、星屑をちりばめたように地上を煌めかせていた。まるで天と地が逆さになったような光景は美しい。夏澄はその華やかな光景をほんやりと眺めた。

遠く高層ビルの端に月が顔を出していた。

——ああ、今日は満月か……

地上のネオンの輝きの中、まるで恥じらうようにひそやかに昇る月は、綺麗な円を描いていた。

小さなため息を零し、夏澄は臉を閉じる。

途端に、張りつめていた神経が緩んでいくのを感じた。

——少しだけ……少しだけだから……

誰に言い訳するでもなくそう思いながら、夏澄は束の間の休息に身を委ねた。

不意に唇に柔らかいものが触れた感覚に、微睡まじろんでいた夏澄の意識が浮上する。

——何？

薄い皮膚の上に触れるそれは、柔らかく温かかった。覚えのあるような不思議な感覚の正体が掴めず、夏澄は瞼まぶたを開けた。

「……んっ。え……？ 社長!？」

瞼を開くと驚くほどすぐ傍に深見の端正な顔が迫っていて、夏澄は一瞬、自分の置かれていた状況がわからなかった。

——え？ あれ……？ 何で、社長？

驚きすぎて、思考がまともに働かない。

「伊藤。この手、どうした？」

固まる夏澄に構うことなく、深見が夏澄の手首を掴みながら問いかけてくる。

「え？ 手……？」

言われて、深見に掴まれている自分の手のひらを見ると、部分的にうつつすらと赤く

なっていた。自分の手のひらを眺めて、夏澄はようやく今の状況を思い出す。

——あ、そうか。社長を休ませるためにホテルを取ったんだ……って、やだ、私。寝たの!？」

自分の失敗を悟り、夏澄は一気に目が覚めた。

——今、何時!？」

「申し訳ありません！ 三時間後に起こすとお約束していたのに!!」

「いや、約束の時間前に勝手に目が覚めただけだから気にするな。それよりこの手、さっきのタオルのせいかな？」

慌てて謝る夏澄を意に介さず、深見は夏澄の手のひらの、火傷やけどともいえない赤味の理由を問うてくる。

言い逃れを許さない眼差しの鋭さに、夏澄は戸惑いを覚えた。

確かに夏澄の手のひらの赤味は、先ほど深見に渡したタオルを絞った時にできたものだろう。しかし、深見が寝ている間にちゃんと冷やしたし、もう痛みもない。明日の朝にはきつと赤味も引いている。こんな風に深見に問われなければ、夏澄は気にもしなかった。

「痛みは？」

「大丈夫です。これくらいなんともありませんから」



「ちゃんと冷やしたのか？ 葉は？」

「ちゃんと冷やしたし、もう痛みもありません。葉なんて塗らなくても明日には消えますよ」

「痕が残ったらどうする!？」

「大げさです。社長に言われるまで忘れていたくらいなんですから」

深見の心配に夏澄は苦笑する。

普段、深見が付き合っている恋人たちであれば、こんな風に火傷すれば大騒ぎになるだろう。

しかし、夏澄の手は彼女たちとは違う。傷だらけだろうと、この帝王のために働ける手であればいいのだ。

そうは思っても、荒れた手を深見に掴まれているという状況が恥ずかしくなってきた、夏澄は腕を引こうとした。

しかし、それは叶わなかった。逆に痛いほどの力が深見の指に込められて、夏澄は思わず顔をしかめる。

「……っ！」

「どうして……どうして、お前は、そこまで……」

低く、聞き取れないほどの声で深見が何かを呟いた。

「じゃ、社長？」

触れている深見の手がひどく熱くなっている気がして、夏澄は動揺に声を上ずらせる。

夏澄の呼びかけに、無言のまま深見が顔を上げた。深見と夏澄の視線が絡む。

その瞬間——まずい。そう思った。

何がまずいのか自分でもわからない。でも、このままではだめだと頭の中で警鐘が鳴る。

囚われる。このままだと自分は……

「社長こそ体調はどうですか？ 頭痛は治まりましたか？」

少しでもこの雰囲気壊したくて深見の体調を尋ねたが、深見は何も答えない。

場を支配する沈黙と緊張感に、夏澄はどうすればいいのかわからなくなる。

深見の眼差しに絡め取られて、身動き一つ取れない。

少しでも動きがあれば、この張り詰めた空気は破裂する。そうなった時、自分がどうなるのか夏澄にはわからなかった。

恐怖と紙一重の甘い緊張感が、ぞくぞくとした予感となって夏澄の背筋を滑り下りた。怖い……そう思うのに、深見の手を振り払えない。

——二人の均衡を破ったのは、甲高い電子音だった。

夏澄が先程、深見のためにセットしたタイマーのアラーム音だ。

夏澄はハツとして深見から視線を離し、掴まれていたのとは反対の手で、スマホのアラームを止めた。

次の瞬間、抗えない力で手首を引かれ、夏澄はソファから立ち上がらされた。そして、そのまま抱き寄せられる。

「……夏澄」

名前を呼ばれた。この五年間、一度も呼ばれたことのなかった名前を。

その瞬間、夏澄は自分もただの女でしかなかったのだと思ひ知る。

——名前を呼ばないで……そんな聞いたこともないような、甘い声で……理性も、戸惑いもその声に溶けて消えそうになる。

腰を抱かれて仰のいた視線の先。間近に迫った深見の瞳に宿る情欲の輝きに、女としての本能がざわめいた。

ずっと憧れだと思っていた。ただの憧れだと思っていたかった。

なのに、今この瞬間に、はつきりと自覚する。

この想いは恋だったのだと——

気づきたくなんてなかった。囚われたくなんてなかった。

近づいてくる唇を避ける術がわからず、夏澄は泣きそうになる。

自覚したばかりの恋が、夏澄の心を惑わせた。

## 立ち読みサンプル はここまで

触れた唇の思わぬ熱さに、夏澄は震えるまま顔を閉じる。

それ以外にどうすればいいのか、わからなかった。

柔らかなその感触に、先ほど夏澄を微睡まろみから呼び覚ましたのも深見の唇だったのだと気づき、混乱はますますひどくなった。

頭の中は真っ白で、ただただ、どうしようという言葉だけが巡る。

混乱して震える夏澄の背中を、男の大きな手のひらが辿る。宥めるようなその手のぬくもりに、体の力が一気に抜けた。腰に回された手が、夏澄の体を深見に押し付けるかのごとく引き寄せた。

わずかに開いた唇に差し入れられた男の舌が、夏澄の戸惑いも、ためらいもすべてを奪い取るうとするように、情熱的に絡む。

唇に触れる吐息に、鼓動がひどく乱れた。

深見が夏澄の口内をかき混ぜる。その慣れない濡れた感触が、深見とキスをしているのだという実感を夏澄に与えた。

それはかつて恋人だった男と交わした、互いの唇を重ね、舌をなめ合っただけの不器用なキスとは完全に別物だった。

まるで快楽を教え込むように、深見の肉厚な舌が淫猥な動きで歯列を辿り、上顎を舐める。きつく舌を吸われて、吐息が奪われた。